

建築物の言語描写における<規模>の多義性
Polysemy of "Scale" in text description of buildings

5. 建築計画-3. 計画基礎

多義性 規模 作用
効果 計画内容 言語描写

正会員 ○佐藤 菜生*
正会員 北川 啓介**
正会員 大井 亮***

SATO Nao
KITAGAWA Keisuke
OI Ryo

1. はじめに

大きさや長さ、広さといった規模に関する概念は、建築物が実体として存在する以上、その機能や性質を決定する初源的な要素のひとつである。しかし、これらの「大きい」「長い」「広い」といった言語は、絶対的な定義をもった言語ではなく、相対性に基づいて決定される概念であり、建築物のおかれた状況、建築家の空間に対する解釈によって、建築領域の中で独自の多義が生じる。本研究では、建築物の言説における規模を表現する言語の多義性について明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象

設計者の言説として十分な資料を得ることができる点を考慮し、継続的に建築作品及びその解説文を掲載している建築専門誌である『新建築』¹⁾を研究資料とする。1980年から2011年までを対象期間とし、設計者自身の作品解説文の中で、建築物やその周辺環境の実体的なスケールを表現する言語と、それにより建築空間にもたらされる効果が記述された789事例を研究対象とする。

3. 研究方法

建築空間において物体がもつ、大きさや長さといった実体的な形態に関する尺度を表現する形容詞を<規模>と定義し、<規模>の種類、種類により修飾され意味付けされた語を主体、種類が空間に及ぼす効果に関する記述のうち動詞および名詞化動詞を作用、作用を受ける名詞を被作用として抽出する。(図1)。主体、被作用、作用は、<規模>の種類と組み合わせることで、<規模>がもつ多義の中から、特定の意味を決定づける要素となる。抽出した<規模>の種類、主体、被作用、作用を分類した上で(表1~4)、被作用、作用の組み合わせから空間効果を導出し、<規模>の種類に対する主体、空間効果のレスポンス分析をそれぞれ行い、得られた散布図から分類同士の相関を整理することにより、<規模>の多義性を考察する。

『新建築』1998年11月号 pp.195 「宮城大学」戸沼幸市+佐藤総合計画 本部棟は逆円錐の一部を切り取ったかたちのまま森に沈めた。北側に大きく開口をとり、水面の陽光を透かして遠くの山並みを眺めようとした。	種類	抽出例	分類
	主体	大きい	〔大きい〕
	被作用	開口	〔開口〕
	作用	遠くの山並み	〔景観〕

図1 テキストの抽出と分類例

表1 <規模>の種類

分類	簡数	分類	簡数	分類	簡数	分類	簡数
〔広い〕	61	〔太い〕	3	〔長い〕	29	〔深い〕	66
〔狭い〕	5	〔細い〕	11	〔細かい〕	3	〔コンパクト〕	3
〔大きい〕	355	〔高い〕	13	〔高い〕	56	〔細長い〕	11
〔小さい〕	72	〔薄い〕	19	〔低い〕	61	〔巨大〕	21

表2 <規模>の主体の分類

分類	記述例	簡数	分類	記述例	簡数	分類	記述例	簡数
〔屋根〕	屋根	38	〔軒・庇〕	軒	87	〔位置〕	レベル	15
〔天井〕	天井	30	〔家具〕	椅子	4	〔面〕	面	19
〔開口〕	窓	205	〔表層〕	外皮	13	〔外部空間〕	バルコニー	40
〔階段〕	階段	8	〔建築〕	建築	13	〔内部空間〕	ホワイエ	48
〔壁〕	壁	71	〔部材〕	方柱	52	〔外部空間〕	グラウンド	33
〔柱〕	柱	13	〔樹木〕	樺の梢	8	〔領域〕	溜まり	23
〔照明〕	照明	8	〔形態〕	曲線	22			
〔室〕	寝室	29	〔素材〕	煉瓦	10			

表3 被作用の分類

分類	記述例	簡数	分類	記述例	簡数	分類	記述例	簡数
〔建築〕	建築物	15	〔都市〕	街並	8	〔独自性〕	独自性	11
〔部材〕	柱	27	〔余白〕	余白	11	〔場所性〕	土地性	8
〔室〕	寝室	26	〔影〕	影	6	〔高さ〕	高さ	2
〔外構〕	庭	24	〔明暗〕	明るさ	8	〔露出さ〕	露けさ	15
〔樹木〕	樹	17	〔日射〕	太陽光	42	〔寒しさ〕	寒しさ	8
〔景観〕	景色	107	〔気象〕	雨	34	〔埃遣さ〕	心地よさ	2
〔自然〕	山	6	〔風〕	風	4	〔無常さ〕	清々しさ	2
〔方向〕	方向	11	〔状況〕	状況	2	〔活発さ〕	活発さ	2
〔形態〕	曲線	17	〔対比〕	対比	11	〔一体感〕	一体感	29
〔規模〕	規模	21	〔機能〕	機能	27	〔開放感〕	開放感	27
〔人間〕	暮らし	4	〔活動〕	活動	21	〔住み感〕	住み感	17
〔物品〕	子供	5	〔交流〕	交流	22	〔透明感〕	透明感	4
〔外部〕	直線	15	〔影響〕	影響	6	〔安定感〕	安定感	2
〔内部〕	条件	34	〔コスト〕	コスト	8	〔システム〕	システム	59
〔領域〕	内部	2	〔関係〕	関係	11	〔象徴〕	シンボル	21
	領域	4	〔期待〕	期待	4	〔視界〕	視界	19

表4 作用の分類

分類	記述例	簡数	分類	記述例	簡数	分類	記述例	簡数
〔獲得〕	得る	62	〔印象〕	印象づく	9	〔拡大〕	広がる	22
〔包含〕	含む	28	〔対比〕	対比する	4	〔縮小〕	縮まる	2
〔運搬〕	運ぶ	2	〔演出〕	演出する	14	〔明示〕	示す	31
〔可視〕	見せる	50	〔不知〕	知らせない	7	〔順応〕	対応する	12
〔付与〕	与える	76	〔活動〕	活動する	5	〔消失〕	消える	17
〔変化〕	変わる	9	〔認識〕	認識する	31	〔上昇〕	上がる	8
〔包含〕	包む	26	〔分断〕	遮断する	2	〔通過〕	通る	7
〔強調〕	強める	36	〔機能〕	はたらく	14	〔親和〕	親しむ	5
〔保持〕	保つ	9	〔誘導〕	誘い込む	7	〔利用〕	使われる	40
〔保護〕	守る	28	〔軽減〕	軽減する	9	〔想起〕	想わせる	34
〔融和〕	繋がる	88	〔錯覚〕	錯覚する	5	〔創出〕	作り出す	90

* 名古屋工業大学大学院工学研究科 博士前期課程・学士(デザイン学)

** 名古屋工業大学大学院つくり領域 准教授・博士(工学)

*** 名古屋工業大学大学院工学研究科 博士前期課程・学士(工学)

Master Course Student, Graduate School of Engineering, Nagoya Institute of Technology, Bachelor of Design.

Associate Professor, Tsukuri College, Graduate School of Engineering, Nagoya Institute of Technology, Doctor of Engineering.

Master Course Student, Graduate School of Engineering, Nagoya Institute of Technology, Bachelor of Engineering.

4. 作用と被作用の組み合わせからみる空間効果

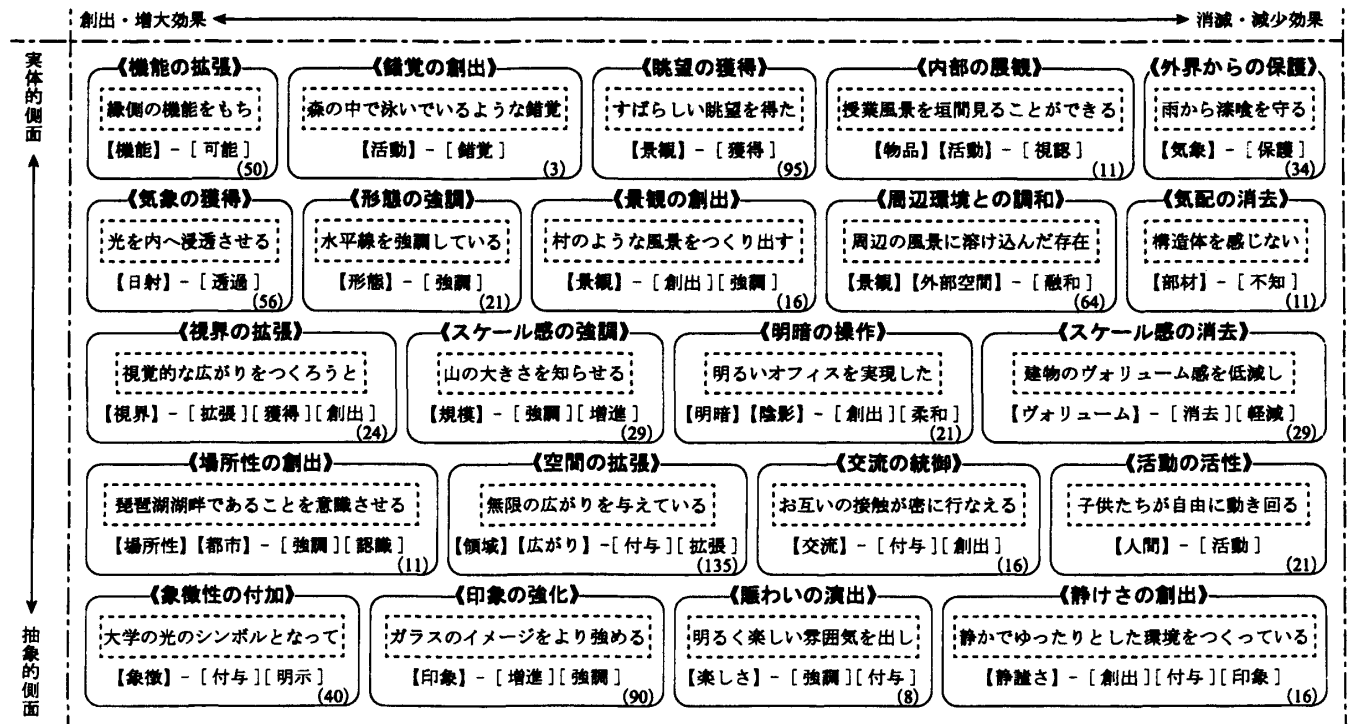
作用と被作用の組み合わせから22種の空間効果を導出した。また、これらの意味内容を整理した結果、縦軸を実体的側面から抽象的側面、横軸を創出・増大効果から消滅・減少効果から消滅・減少効果に配列できた(図2)。

《機能の拡張》は、【機能】と【可能】などの組み合わせにみられ、主体がもつ標準的なスケールを操作することにより、主体本来の機能を高めたり、新たな機能を付加させる。《周辺環境との調和》は、【景観】、【外部】と【融和】などの組み合わせにみられ、周辺の街並や自然を模すようにスケール操作を行うことにより、建築物の存在感を抑え、周辺の環境や景観との秩序を生み出す。《スケール感の強調》は、【規模】と【強調】、【増進】などの組み合わせにみられ、特定のスケールを操作することによって、他方のスケール感を際立たせ、強調させる効果である。これには異なるスケール感を混在させることでスケール感を強調する対比的手法と、類似したスケール感を併存させることによる調和的な手法がみられる。

5. <規模>の種類と主体による分析

<規模>の種類と主体によるコレスポネンス分析を行い、散布図から両者の分類の相関を整理した(図3)。「大きい」,「狭い」は【開口】、【面】と相関を示し、「大きな窓面」といった建築内部と外部空間の接面の描写により、垂直平面における面積の大小を表す。「大きい」

は【屋根】、【内部空間】とも相関を示し、「大屋根の下に広がる空間」といった描写により、水平面の面積の大小を表す。これらの<規模>は面的な形状を調整するために用いられる。「細長い」,「低い」は【形態】、【建築】と相関を示し、「低く抑えられた平屋」といった描写により、建築物の全体像を描写する。「深い」は【軒・庇】と相関を示し、「深い庇のつくる歩廊」といった描写により、庇の長さと同時にその奥の内部空間の広がりも表現する。これらの<規模>は特定の部分だけに注力せず、建築全体の立体形状を生み出すために用いられる。「薄い」は【素材】と相関を示し、「石は薄くスライスされ」といった描写により、面的な部位の厚みを表現する。「高い」は【天井】と相関を示し、「高い天井高」といった描写により、空間内での垂直方向の位置を示す。これらの<規模>は部材単体に着目し、その部材が本来もつべき適切な規模へと調整するために用いられる。「広い」は【室】、【領域】と相関を示し、「自由な使い方ができる大部屋」といった描写により、建築に求められる用途を十分に果たせる面積をもつことを表す。「広い」は【半外部空間】とも相関を示し、「濡縁は舞台としても利用される」といった描写により、濡縁が複数の機能をもつことを示す。これらの<規模>は空間を内包する主体と組み合わせたり、建築空間内でのアクティビティを創出する。



※ 図中《 》は空間効果、()内は【被作用】-【作用】の組み合わせ例、()内は記述例、()は事例数を示す。

図2 <規模>がもたらす空間効果

6. <規模>の種類と空間効果による分析

<規模>の種類と空間効果によるコレスポネンシ分析を行い、散布図から両者の分類の相関を整理した(図4)。「細長い」,[大きい]は《象徴性の付加》はと相関を示し、「大きな明かりの塊は、大学の光のシンボルとなる」といった描写により、建築物にひときわ目立つ形状を与え、象徴性をもたせる。[巨大],[太い]は《印象の強化》と相関を示し、「太い丸太柱が逞しい」といった描写により、スケールが与える頑丈さや安定感といった印象が表現される。これらの<規模>は主体がもつ特性を増幅させたり、新しい特性を創出する。[薄い],[狭い]は《スケール感の消去》と相関を示し、「薄い被膜により質量を消滅させる」といった表現により、建築物に軽やかな形状をもたらし、建築物の重量感を軽減させる。[長い],[深い]は《形態の強調》と相関を示し、「長い石の壁が、建築の外観の造形を特徴づける」といった描写により、建築物の造形を際立たせ、審美性をもたらす。これらの<規模>は建築物のプロポーションを調整し、形態を創り出す。[低い]は《気配の消去》と相関を示し、「建物を低く構え、全体を把握しにくいようにした」といった描写により、建築物自体の視認性を悪くすることで、建築物の存在感を希薄なものとしている。[小さい]は《交流の統御》と相関を示し、「小さな開口部でプライバシーを確保する」といった描写により、スケールの操作によって人々の交流を操作し、空間がもつ公共性と私性を統御している。これらの<規模>は主体が持つ特性を減少させたり、制御したり、消去する。

7. 主体と空間効果にみる<規模>の多義性

主体、空間効果と<規模>の種類のコレスポネンシ分析を考察した結果、<規模>の多義性として、15種の類型を得た(図5)。Aは建築に積極的に外気や風を取り入れる様子が描写され、{外部空間},{半外部空間}と《気象の獲得》などの組み合わせにより、通風を行いやすいように建築物の周囲を計画する様子が表現される。これらは[大きい],[小さい]といった<規模>により建築周囲の環境の規模を表現し、風が取り込まれる状況を描写する。Bは人間の活動領域が拡大される様子が描写され、{外部空間},{領域}と《空間の拡張》などの組み合わせにより、内外が一体となることで、新しいアクティビティが生まれる様子が描写される。これらは[大きい],[広い],[高い]といった<規模>によって広大さを与えられ、建築に豊かさを与える。Dは建築物が固有の風景を創出する様子が描写され、{形態},{建築}と《景観の創出》などの組み合わせにより、景観の一部としての建築物の様子が描写されている。これ

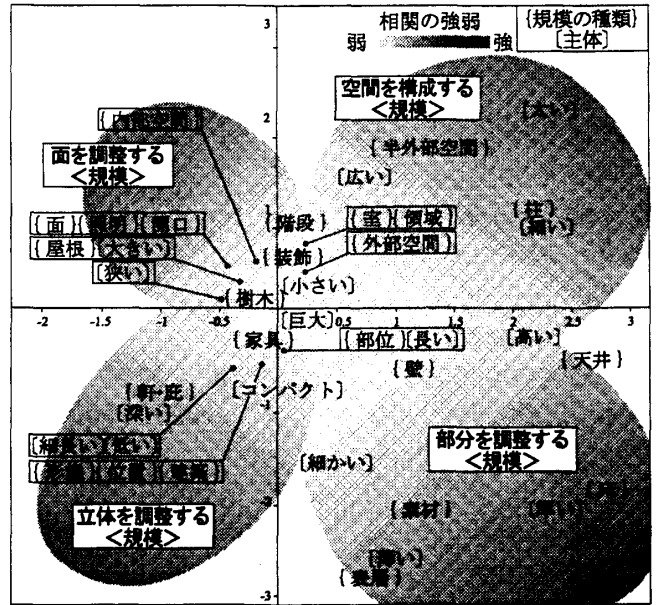


図3 <規模>の種類と主体のコレスポネンシ分析散布図

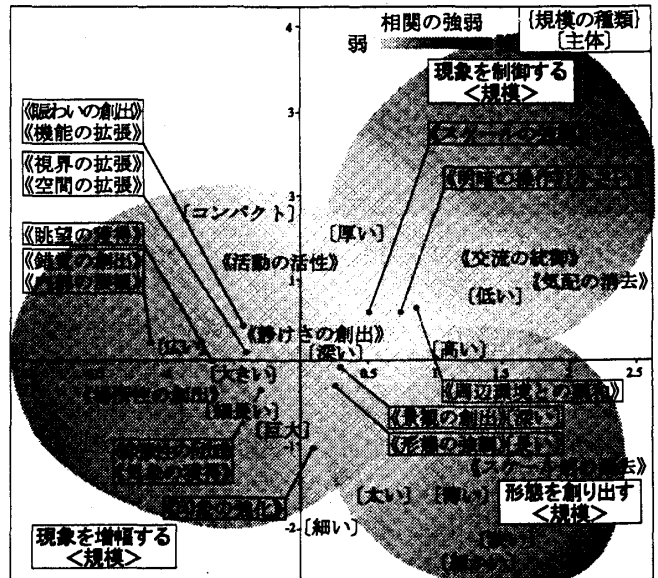
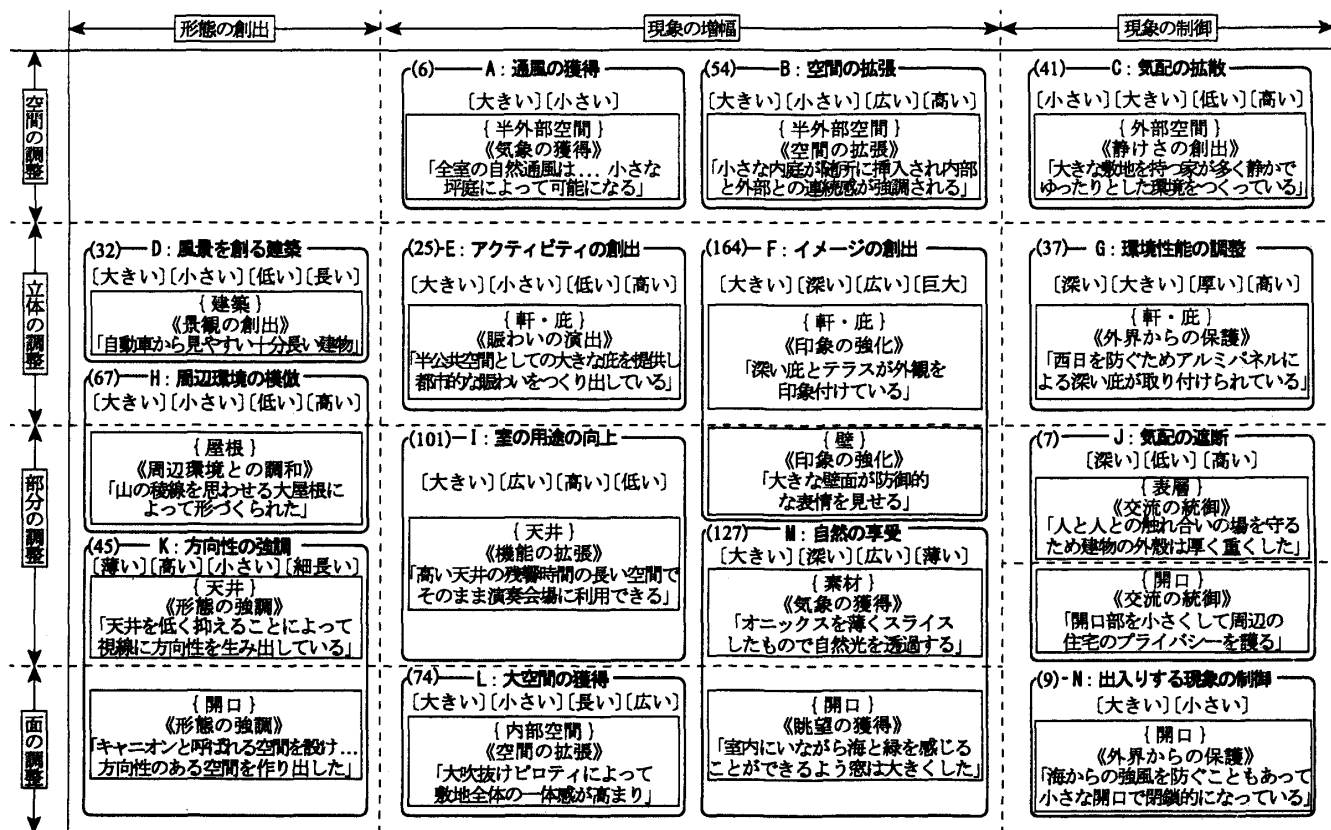


図4 <規模>の種類と空間効果のコレスポネンシ分析散布図

らは[長い],[大きい]といった<規模>によって周辺の景観との差を示し、建築物に独自のイメージを与える。Eは建築物が内包する多様な活動が描写され、{家具},{建築},{軒・庇}と《賑わいの演出》,《活動の活性》などの組み合わせにより、アクティビティを創る様子が描写される。これらは[コンパクト],[大きい]といった<規模>によって広さを示したり,[深い]といった<規模>によって、アクティビティの質を描写する。Fは建築全体や建築部位に特徴的な形態を与える様子が描写され、{形態},{建築},{素材}と《印象の強化》,《象徴性の付加》などの組み合わせによって、建築物に表情を与える様子が描写されている。これらは[巨大],[太い]といった<規模>によって力強さを与えられ、



※ 図中 { } は主体, 《 》 は空間効果, [] は<スケール言語>の種類, () は事例数を示す。

図5 主体と空間効果からみる<規模>の多義性

建築物のシンボルとなる。Gは雨や風、日射などを防ぐ様子が描写され、{軒・庇}と《外界からの保護》などの組み合わせにより、建築物に頑強な性質を与える様子が表現されている。これらは[深い]、[低い]といった<規模>によって、外界から内部空間を遠ざけ、室内の環境性能を調整する。Hは建築周辺の景観を倣って建築物の外観を創り出す様子が描写され、{建築}、{壁}、{屋根}と《周辺環境との調和》、《景観の創出》などの組み合わせにより、周辺環境と調和する。これらは[低い]、[深い]といった<規模>によって、自然界の形態を模倣する。Jは人の気配や物の存在を軽減または消去する様子が描写され、{壁}、{天井}と《気配の消去》、《交流の統御》などの組み合わせにより、大きな面を用いることで人の感覚を遮断する様子が表現されている。これらは[厚い]、[高い]、[広い]といった<規模>によって、人の気配を届きにくくしたり、室体積を増やすことで物の存在感を希薄にしている。Nは日射や風、人の視線が建築内外を出入りする様子が描写され、{開口}と《外界からの保護》《交流の統御》などの組み合わせにより、窓や扉を介してこれら外気や視線の流動が行われる様子が表現されている。これらは

[大きい] [小さい] といった<規模>によって、流動部分の面積を調整し、現象の程度を制御している。

8. 結論

規模が捉える領域は、文章中で組み合わせる主体によって空間全体、立体形状、部分形状、面形状と複数の側面の存在がみられた。規模が空間全体に作用する場合、建築が内包する機能を向上させ、空間の快適性を高める効果や、人間活動の活性を促す効果を与える。立体形状に作用する場合、建築物の形態を強調し、建築外部との関係を構築する。部分的形状に作用する場合、部分がもつ性能を高め、建築内部での機能を向上させる。面形状に作用する場合、室や窓の面積へ作用し、建築の計画に影響を与える。また、「広い」「長い」といった多量的な規模が複数の多義をもち、意味を拡張し混在させているのに対し、「狭い」「細かい」といった少量的な規模は意味を特定し強化する。以上より、設計者が規模を用いる際は、主体との組み合わせによって捉える領域を特定し、規模の大小によって建築がもつ意味の限定や拡張を行い、それらの組み合わせにより建築空間を構成している。

参考文献

- 1) 『新建築』, 新建築社, 1980.1-2011.12